

『風立ちぬ』 2013年／日本／宮崎駿監督作品

il faut tenter de vivre...

それでも私たちは、「生きようと試みなければならぬ…」

会員 駒井 知会 (60期)



「風立ちぬ」
© 2013 二馬力・GNDHDDTK
全国東宝系にて大ヒット公開中

(以下、映画の内容について触れている部分がありますので、これから御覧になる予定の方は、御注意下さい。)

宮崎駿監督が強烈な反戦映画を創った。見終わって最初にそう思った。主人公の堀越二郎は、戦闘機の設計を行った男である。作中、彼は反戦的な言葉を口にするわけでもなく、黙々と戦闘機を造り続けている。それでも、この映画は、戦争に突き進んだ日本社会が、一途に夢を追いつけた青年に対して、どのような仕打ちを以て答えたのかを、圧倒的な映像と、敢えて語られず暗渠化されたストーリー展開の両方で、私たちに突き付ける。

映画のラスト近く、主人公の堀越二郎が、戦闘機の残骸が転がる荒野を彷徨う場面がある。二郎に尋ねる声がある。二郎が心の師とし、友とするカプローニの声である。

「君の10年はどうだったかね。力を尽くしたかね」

二郎が答える。

「はい、終わりはズタズタでした」

彼を導いてきた声が語りかける。

「国を滅ぼしたんだからね。…」

今回の宮崎作品は「大人の映画だ」「戦争を扱っている」と、事前に様々な情報が耳に入ってきていた。しかし、宮崎監督が既に発表してきた作品のうち、「紅の豚」は明らかに、いわゆる子ども向けに作られたものではないし、他にも戦争を扱った作品はある。特に「紅の豚」は、学生時代に見たときには気付かなかった、登場人物の心の営みの深さに、後年改めて見て、胸を突かれた。

しかし今回は、実在の人物にインスパイアされた人物造形がなされていること、そして、先の大戦を扱っていることから、本作に賭ける宮崎監督の覚悟が、並々ならぬものであることが伝わってくるし、また、見る方にも、

(その監督の強い想いを正面から受け止める気持ちがあるのであれば)ある種の覚悟を求められる映画だと思った。

「反戦映画だ」という感想の次に、第二波として私を襲ってきたのは、「力を尽くして生きよ」という、強いメッセージだった。

時代の風が吹く時、その風は、いつも心浮き立つものとは限らない。圧政や暴虐の嵐もあれば、放射能を含む風が吹く時さえあることを、私たちはもう知っている。この社会とそこに生きる人々の心が、ともすれば閉塞感や排外主義に塗れ、明日に明るい兆しの見えない世情にあって、「生きづらさ」は、昨今とみに、非常に生々しい感触を伴って、心に迫ってくる。「それでも」と、宮崎監督は訴え掛ける。この先、どんなに苦しくとも、「どうせ何をやっても変わらない」と自暴自棄になってはいけぬ、享楽に流れて怠惰に墮してはいけぬ、まして、絶望して、生きることを放棄することは決して許されぬ、と。

この星の自然の「ため」を思えば、人類など、もう滅びた方がいいのではないか、と思うことがある。殺し合い憎しみ合い、地球を絶望的に汚染してやむことのない「人類」という歪な生命体に、それでも「力を尽くして生きよ」と宮崎監督は言う。そして、私たちの持ち時間がそんなに長くはないことを、二郎と里見菜穂子の恋を通じて、教えてくれる。

二郎と菜穂子の恋愛については、紙幅が尽きたので、一言だけ。このふたりも、決して互いの存在が互いの「ため」になりきれない部分を持ちながら、それでも、分かち難く惹かれ合い、決定的に支え合っている。

私も、こんな関係性を愛する人と結びたいと思いました。